

## 創刊号 編集後記

恵寿総合病院医学雑誌創刊号の編集後記を書くようにいわれてから、やがて半年以上の月日が経った。既に草稿は書いてあったのだが、ふと気付くと締め切りが迫ってきていて、あわてて筆を加えた。

私が当院に赴任して間もない頃、他院から送られてくる医学雑誌の回覧を手にして、当院には同種の雑誌がないことに気が付き、以来、密かに寂しく思っていた。数年前の管理会義だったかと思うが、ふとした機会に、当院でも医学雑誌を発刊したらどうかと発作的に口走ってしまったことがあった。その場の雰囲気は、皆一様に気持ち的には同意だが、いざ創るとなると大変だし、誰がやるの、といった感じだった。口走った私も、自分が音頭を執る余裕と元気がないのにもかかわらず、うっかり口が滑ったことを反省し、そのまま口をつぐんでしまっていた。そんなことがあったのも忘れてしまっていたのだが、昨年医師の会か何かの会議で、川村医師から、当院の医学雑誌を是非創刊したいとの提案があり、ついては私に顧問的な役割をお願いしたいとの発言があった。突然のことだったのと、大変な仕事でありうっかり安請け合いするわけにはいかないと考えたので、その場ではイエスともノーとも答えずにやりすごしていた。後日、山本病院長に廊下で呼び止められ、この件よろしくとのこととお言葉があり、否とは言えなくなってしまった。川村先生が一度口にしたことだから何があろうと実現に向けて邁進するだろう。私は、周囲が置去りにならないように調整役に徹しよう、と思って引き受けることにした。そんな訳で私の方は、進捗状況の報告を受ける時などに、「最初から無理をし過ぎないで、もう少しゆっくり行こうか」などと手綱を少し引く程度だった。しかし、その後の進展ぶりは私の想像を見事に裏切って目を見張るばかりだった。

一番心配したのは原稿が十分に集まるかどうかだったが、心配をよそに次々と集まり、最終的に予定の10編を超えた。総説2編、原著6編、症例報告3編、短報1編であり、いずれも力作である。川村編集委員長の並々ならぬ熱意がその原動力だったことは言うまでもない。と同時に、職員の多くが、このような発表の場を潜在的に渴望していたのではなかったかとも思う。その気になれば学会誌等に投稿することは可能だが、医師以外のメディカルスタッフや研修医にとってはその敷居は高く、臆してしまうことも多かったと思われる。そんな気持ちに川村先生が見事に火を灯してくれた。心から深く感謝したい。

今後の課題は、質と量のレベルを下げないように、少しずつでよいから向上を心がけて、発行を続けていくことにある。継続は力というが、本雑誌が定期的に刊行され続けることが最も重要なことだと思う。創刊号は黙っていても力が入るものだが、真価は第2巻以降に問われるのかも知れない。だからこそ、職員の皆さんには今後の更なる努力と協力を切にお願いしたい。

編集顧問 東 壮太郎